



越冬キュウリ

第一集出荷センター
営農指導員 川島 俊一

農業 テクニカル ダイアリー

Agricultural-work technical diary



ソラマメ

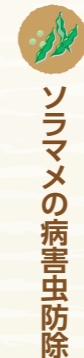
販売開発部営農振興課
営農指導員 内山 晃宏



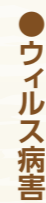
振り返り

昨年度は、本圃定植後(11月)から比較的気温が高く、日照量も確保できたため、冬場の生育は旺盛で前進化しましたが、2月下旬〜3月上旬は寒暖の差が激しく、不安定な気候が続いたため下段の花落ちが多発しました。

また、4月中旬に起きた強風により上段の着莢率が低下し、全体としては平年と比較して収穫量が少ない傾向にありました。



ソラマメの病害虫防除



ウイルス病害

数年前から、管内の圃場ではソラマメのウイルス病が発生しています。このウイルス病は土壌伝染性の新規のウイルスで、感染した場合は株に萎縮症状、葉にえその輪紋、莢にえそ症状が出るのが特徴です(写真①参照)。また、早期に発病すると生育が停止し、収穫に至らないこともあります。

昨年度は、現地圃場にて土壌消毒試験を実施し、バスマミド微粒剤でウイルス病の抑制効果が確認されました。山武農業事務所、千葉県農林総合研究センターと協力し、バスマミド微粒



定植から収穫までの管理

越冬栽培は、9月に播種し、11月から長い人で翌年6月まで収穫する作型です。播種後から日射量や気温が低下するため、樹勢の維持・管理にはとても気を使う栽培です。

定植時期は10月中旬になりますが、定植までに元肥、灌水を行い、土にたっぷり水分を含ませておくようにしましょう。定植の目安は本葉3枚程度で、定植直後から活着するまではたっぷり灌水を行い、その後は樹勢を見ながら灌水を調整しましょう(樹勢が弱いようであれば多めに、強いようであれば調整程度に)。



収穫が始まってからの管理

追肥や灌水のタイミングを判断するには、開花雌花の大きさや、実の形、芯葉の色つやを確認します。一回の量はあまり多くせず、灌水の度に薄く施用するよう心がけましょう。



温度管理と整枝方法

温度管理は午前中に27〜30度、午後からは温度が徐々に下がるよう調整し、日没から午後9時ごろ

剤の適用拡大に向けて、来年度も管内圃場にて試験を行います。

なお、現在できる対策としては、①連作を避ける、②水はけの悪い圃場を選ばない、③ウイルス病と思われる症状が確認された圃場では、発病株を抜き取る、④土壌を他の圃場に持ち込まないためにトラクター等を使う管理を最後に行う、の4つです。

赤色斑点病

初めは葉の表面や裏に小さな斑点が現れ、症状が進行すると大型の斑点となり葉や莢にも生じ、収量や外観を著しく損ねます。3月以降の降雨後に多く発生するため、降雨後の予防散布が効果的です。また、肥料切れや排水不良の圃場でも発生が多くなりますので注意しましょう。

さび病

4月以降、白い斑点の中に褐色のさび病の病斑が発生します。下葉に発生しやすいので、よく観察し、早期防除に努めましょう。

アブラムシ類

アブラムシは3〜4月頃になると多発し、莖や葉や莢に虫がたくさん群がって葉の汁を吸い、株の生長が止まります。定植時にはアドマイヤー1粒剤を処理し、虫発生時にはアディオ

までには13〜15度になるようにします。最低気温11度を下回らないよう注意し、出荷最盛期には13度を下回らないよう心がけましょう。また、夜明け前から積極的に加温することによって、効率よい同化作用が行えるため、収量アップには効果的です。

つる下ろし栽培は、定植時期や樹勢、ハウスの環境により考慮する必要がありますが、下からの側枝2本を5〜7節で孫枝に更新し、中〜上段の2本の側枝も4〜6節で子孫に更新する方法が一般的となっています。このつる下ろし栽培では、果実の肥大の良し悪しで、力枝の伸び方が変化します。肥大不良のものは伸びやすく、肥大の良いものは温度が高くても間延びせず伸長します。このことから、つるが間延びするからと言って、温度を下げて効果がなく、適正な温度管理を行い、果実の肥大を早めるようにすることが重要です。

また、曇雨天時には、低温・過湿状態になりがちなため、徒長しやすくなります。日中にも暖房機や送風機を稼働させたりすることで、18〜20度で管理するよう心がけましょう。

乳剤やモスヒロン顆粒水溶剤等を散布するのが効果的です。また、殺虫剤散布だけでなく、摘芯も組み合わせると発生を防ぎましょう。



写真① ソラマメウイルス病症状



病害虫

厳寒期に入れば虫の飛び込みはほとんどありません。しかし、ハウスに残っている虫が繁殖し、被害を出す恐れがあります。収穫初期のうちに定期的に葉を散布し、厳寒期に虫を残さないよう心がけましょう。

また、乾燥させすぎるとうどんこ病(写真②)に、低温・過湿がべと病(写真③)や菌核病発生につながります。ハウス内の温湿度管理を徹底し、ムラができないよう十分気を付けるとともに、天候不順時には予防剤の散布を忘れずに行いましょう。



写真② うどんこ病症状



写真③ べと病症状

7月の分析経過について

残留農薬分析点数…合計0点(7月は実施なし)

土壌診断点数 …… 合計65点